

奄美大島の外来種

奄美大島にはマングースの他にも、ノネコやノヤギ、クマネズミ、オオキンケイギクなど多くの外来種が定着しています。新しい外来種をこれ以上増やさないためにも、もともと奄美大島にいない生きものを、決して捨てたり、逃がしたりしないでください。



ノネコ



ノヤギ



クマネズミ



オオキンケイギク

●奄美諸島の外来種 HP <http://kyushu.env.go.jp/naha/wildlife/data/130902aa.pdf>



奄美マングースバスターズの活動にご協力をお願いします

2005年に結成した奄美マングースバスターズは、地域住民や研究者など多くの方々の協力を得て、マングース防除を進めてきました。

奄美マングースバスターズでは日々の捕獲作業に加え、地域のゴミ拾いやブログなど普及活動も積極的に行っています。奄美大島からのマングースの完全排除に向け、これからも、マングース防除事業と奄美マングースバスターズの活動に、ご理解とご協力をお願いします。

●バスターズのブログ

奄美の自然や文化を綴る「ネイチャーカレンダー」

<http://amb.amamin.jp/>

●バスターズの Facebook

<https://www.facebook.com/amamimongoosebusters>



発行 2013年9月

環境省 那覇自然環境事務所

〒900-0027 沖縄県那覇市山下町5-21 沖縄通関社ビル4F



環境省

地球のいのち、つないでいこう

生物多様性

奄美野生生物保護センター（現地問い合わせ先）

〒894-3104 鹿児島県大島郡大和村思勝字腰ノ畑551番地

TEL:0997-55-8620

自然環境研究センター奄美大島事務所（奄美マングースバスターズ）

〒894-0008 鹿児島県奄美市名瀬浦上1385-2

TEL:0997-58-4013

編集：一般財団法人 自然環境研究センター デザイン：（株）アートポスト

写真提供：常田守、阿部光穂、後藤義仁、山室一樹、吉原隆太、

一般財団法人 自然環境研究センター

世界でたったひとつの

奄美を守る

奄美大島マングース防除事業



Amami Oshima



奄美大島の生きものたち

オーストンオオアカゲラ

奄美大島は亜熱帯に位置し、1年を通して暖かく、たくさんの雨が降ります。スダジイを主とする国内最大規模の亜熱帯照葉樹林が広がり、サンゴ礁の美しい海に囲まれるなど、豊かな自然が残された島です。また、ユーラシア大陸や他の島と何百万年もの長い時間生きものの交流がなかったため、奄美大島独自の生物多様性が育まれてきました。このような自然条件と島の形成過程を反映して、奄美大島には世界的にも珍しい生きものが数多く生息しています。例えばアマミノクロウサギ。現在生息する最も原始的なウサギのひとつで、奄美大島がはるか昔にユーラシア大陸とつながっていた頃に陸地を渡って入ってきたとされています。

このような生物多様性の豊かな奄美大島の自然を、私たちは将来にわたって残していかなければなりません。



ケナガネズミ

学名 *Diplothrix legata*

奄美大島、徳之島、沖縄島北部に生息しています。日本に生息する在来ネズミのなかでもっとも大型で、主に樹上で生活し木の実などを食べます。



アマミトゲネズミ

学名 *Tokudaia osimensis*

奄美大島のみに生息し、名前の通りトゲのような毛で覆われているのが特徴です。徳之島、沖縄島北部には、それぞれトクノシマトゲネズミ、オキナワトゲネズミが生息しています。



アマミノクロウサギ

学名 *Pentalagus furnessi*

奄美大島と徳之島のみに生息し、もっとも原始的なウサギの仲間とされています。昼間は斜面上に掘った巣穴で過ごし、夜になると巣を出て植物の芽やシイの実などを食べます。



ハブ

学名 *Protobothrops flavoviridis*

奄美大島、徳之島、沖縄島などに生息する毒ヘビです。咬まれると死に至ったり、後遺症が残ることがあります。夜行性で、主にネズミや小型の鳥類、トカゲ、カエルなどを食べます。



リュウキュウアユ

学名 *Plecoglossus altivelis ryukyuensis*

奄美大島と沖縄島のみに生息しています。奄美大島では住用川や役勝川、河内川などに生息し、沖縄島では一度絶滅してしまったため、奄美大島のものが導入されました。



アマミエビネ

学名 *Calanthe aristulifera* var. *amamiana*

奄美大島のみに生育するランの仲間です。3~4月にピンクや白などとても美しい花を咲かせます。かつては多く見られましたが、現在は乱獲などにより少なくなっています。



アマミシカワガエル

学名 *Odorrana splendida*

奄美大島のみに生息しています。緑色に金色のはん点があり、日本で一番美しいカエルといわれています。繁殖期の夜には、独特の鳴き声で溪流内がにぎやかになります。

奄美大島

面積：712km²
最高標高：694m(湯湾岳)
人口：約68,600人



フェリエベニボシカミキリ

学名 *Rosalia ferriei*

赤色の体に黒い星が入った美しいカミキリムシです。奄美大島のみに生息し、成虫は夏の短い期間に発生します。スダジイの古木などを利用するため、森林伐採などにより減少が心配されています。

世界自然遺産 登録候補地 ～奄美・琉球～



2013年1月、奄美や琉球のすばらしい自然を人類共通の遺産として将来にわたり保護していくため、「奄美・琉球」を世界自然遺産の登録候補地とすることが正式に決定されました。

世界遺産とは、世界遺産条約に基づき、世界で唯一の価値があると認められ世界遺産一覧表に記載されたもので、文化遺産や自然遺産などがあります。

今後、「奄美・琉球」の世界自然遺産の登録に向け、国立公園の指定や希少種の保護、外来種対策など様々な取組について、関係者とともに一層進めていくことが必要となります。

奄美大島のマングース防除事業は、奄美本来の豊かな生物多様性を取り戻すために不可欠な取組であり、世界自然遺産登録を目指す上で欠かせないものです。引き続き、マングース防除事業を着実に進め、世界自然遺産の登録実現に寄与していきます。

あまくろです。
よろしくね。





マングースって どんな生きもの？

今、奄美大島にはマングースが生息しています。マングースは奄美大島にはもともといなかった動物ですが、1979年にハブやネズミの駆除を目的として奄美大島に放されました。マングースは世界中のあちこちで放され、その先々で生態系に被害を及ぼし、問題となっている外来種です。2005年に、外来生物法に基づく「特定外来生物」に指定されました。

ファイリマングース※の生態学 *Herpestes auropunctatus*

Q どこにいるの？

中東から中国にかけて、南アジアの広い範囲が本来の生息地です。ハワイやカリブ海の島々にも、ネズミの駆除などを目的として放され、少なくとも76の島・地域で定着しています。日本では、奄美大島、沖縄島、鹿児島市の一部で生息が確認されています。



Q 大きさは？

頭からしっぽの先までの長さはオスで約60cm、メスで約50cm。
体重はオスで600～1000g、メスで400～600g。

特定外来生物とは

海外から日本に持ち込まれた生きもので、生態系や人の生命、農業などに対して被害を及ぼすものとして、外来生物法に基づいて指定されたもの。特定外来生物に指定されたものは、飼養や運搬、輸入、野外に放つことなどが原則として禁止されます。マングース以外に、アライグマやカミツキガメなどが指定されています。



※奄美大島に生息するマングースは、従来ジャワマングース *Herpestes javanicus* とされていましたが、最近の研究によってファイリマングース *H. auropunctatus* に分類されることがわかりました。

Q

食べものは？

昆虫などの無脊椎動物、トカゲやネズミなど小型の脊椎動物を主な餌としているほか、鳥や哺乳類も食べています。

Q 生態は？

繁殖：奄美大島では繁殖は2～10月で、出産は4～9月に集中しています。1回の繁殖期で1～2回出産し、1回の出産で1～5頭(平均2.26頭)の子を産むとされています。産まれてから8カ月程度で成獣になります。

寿命：奄美大島では平均1～2年前後で生涯を終え、長生きする個体でも3～4年程度と考えられています。

行動範囲：マングースに発信器を付けてその行動を追跡した調査の結果からは、行動圏(日常的に移動している範囲の面積)は成獣のオスで20ha程度、メスで24ha程度でした。中には短期間で2km以上移動している個体もいます。

奄美大島にはいつ、どうして連れてこられたの？

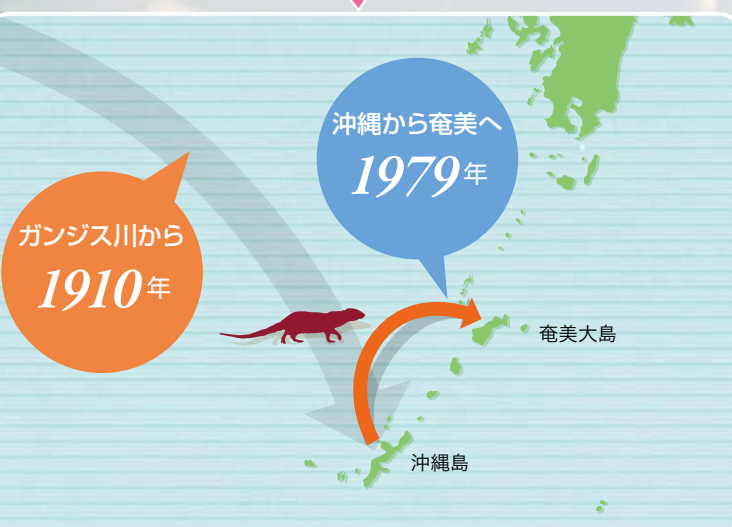


ネズミを食べるハブ。マングースはハブを減らすことを期待して奄美大島に放されましたが、実際にはハブが大幅に減ることはありませんでした。

奄美大島や沖縄島には毒蛇のハブがいます。ハブがいることで奄美や沖縄の人たちは大変な苦勞をしてきました。また、クマネズミが増えすぎてサトウキビを食べてしまうことも大きな悩みでした。そこで、東京大学の動物学者だった渡瀬庄三郎博士は、1910年にハブとクマネズミを減らすことを期待して、インドから連れてきたマングースを沖縄島に放しました。その後、思っていたような効果が得られなかったにも関わらず、沖縄島から奄美大島にマングースが連れて来られたのです。最初は1979年に名瀬市(現奄美市名瀬)の赤崎地区に30頭が放されたとされています。

マングースはどこから やってきたの？

1910年に、インドのガンジス川河口から沖縄島に導入され、1979年に沖縄島から奄美大島に運ばれて、放されました。



マングースが森を一変させた

大学最後の夏休み、初めて奄美大島を訪れたのは1987年のことです。1週間ほどの滞在で、奄美大島と加計呂麻島の山や海をあちこちまわりました。なかでも夜の金作原の林道では、次々に現れるアマミクロウサギ、アマミヤマシギに感動したものです。翌、1988年春に学校を卒業して奄美大島での生活を始めました。原付にまたがって瀬戸内町や住用村(現奄美市住用町)の林道に足繁く通いました。この頃はアマミトゲネズミが原付の前を飛ぶ姿をよく見ましたし、アマミクロウサギにもたくさん会いました。ハブ捕りの南竹一郎さんと冬の金作原に行ったときです。夜の林道で鳥のさえずりのような正体不明の鳴き声が響いていて、南さんがアマミシカワガエルだと教えてくれました。数百は鳴いているのではないかと思うほどの大合唱でした。それから何年もたたないうちに、金作原から動物の気配を感じられない状態になってしまうなどとは思いませんでした。マングースの侵入と増加が、この森を一変させたのです。



1990年、マングース調査中の筆者と、半田ゆかりさん(写真提供/高槻義隆)

阿部慎太郎(環境省那覇自然環境事務所)



マングースによって どんな問題が起こっているの？



問題

1

マングースが来て何がおこった？

マングースはハブやクマネズミを減らすことを目的として奄美大島に持ち込まれました。しかし、ハブやクマネズミが夜に活動するのに対し、マングースは昼間に活動するため、マングースがハブやクマネズミを食べることはあまりありませんでした。一方で、昼間は巣穴にいるアマミノクロウサギの幼獣や地面の上に巣を作るアマミヤマシギは、ハブよりも簡単に食べることができます。このため、アマミノクロウサギなどは格好の標的となり、次々と食べられてしまい、数を減らしていきました。このように、ハブやクマネズミを減らすことを期待して放されたマングースですが、期待していたような効果は得られなかったばかりか、もともと奄美大島にいた生きものたちが少なくなるという予想しなかった結果となってしまいました。

アマミノクロウサギの巣穴に侵入するマングース



母親は幼獣の巣穴を何度も訪れる



幼獣の巣穴に入ったマングース。尾と後肢が見える



侵入した2分後に巣穴から跳びだしたマングース

(写真提供／山田文雄)

問題

3

奄美の生きものたちが消える！？

マングースの数が増え、分布を広げるとともに、多くの生きものが食べられていることが明らかになってきました。マングースの胃内容物や糞を分析した結果、アマミノクロウサギやアマミトゲネズミなどが確認されたほか、アマミシカワガエルなどの両生類、オキナワキノボリトカゲなどの爬虫類も食べられていることがわかったのです。これらマングースに食べられていた生きものの多くは、世界中でも奄美大島にしか生息していません。マングースが増えるとともに、奄美の生きものたちはどんどん少なくなっていくのです。

マングースに食べられる生きものたち



リュウキュウアオヘビを食べるマングース



マングースの糞をほぐしてみると、アマミノクロウサギの体毛が出てきた
(写真提供／山田文雄)



アマミトゲネズミ

問題

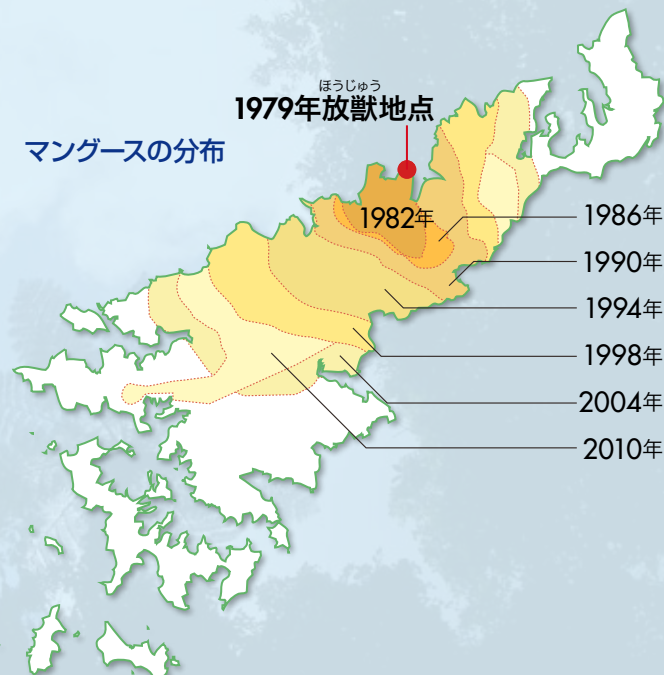
2

マングースが増え、島に広がる！

1979年に名瀬市（現奄美市名瀬）赤崎地区で放されたマングースは、1990年頃には名瀬市のほぼ全域に分布を広げ、1998年には西は大和村や住用村（現奄美市住用町）、東は名瀬市と龍郷町の境界あたりまで分布を広げました。2010年には、それまでマングースが確認されていなかった南西部の宇検村でも捕獲がありました。

1979年に奄美大島に放されたマングースの数は30頭とされていますが、2000年にはおよそ10,000頭にまで数を増やしたと推定されています。

マングースの分布



課題

どうすれば奄美の生きものを守れる？

マングースは奄美大島の大切な生きものを食べてしまいます。大切な生きものを守るためには、マングースを捕まえて減らすしか方法がありませんでした。このため、地元団体や行政が協力してマングースの影響調査や捕獲を行うなど、奄美大島におけるマングース対策が動き始めました。

マングース対策によって増加が期待される生きもの



アマミヤマシギ



アマミハナサキガエル

マングースに食べられ、数が少なくなってしまった奄美の生きものを守るため、マングース対策が始まりました



マングースを捕獲するためのわなの点検

マングース 防除事業

マングースがいらない 奄美を取り戻そう

マングースが奄美大島に定着してしまったことで、奄美の生きものたちはみるみる姿を消していきました。「このままでは奄美の生きものたちがいなくなってしまう」。そんな危機感を抱いた島民の方々の後押しによって、2000年から本格的なマングース駆除事業が始まりました。2005年からは外来生物法に基づく防除事業が始まり、将来的に奄美大島からマングースを完全排除することを目指して作業を進めています。

証言 1



金作原は豊かな 命の森だった

常田 守(つねだ まもる) さん
(環境ネットワーク奄美・写真家)

マングースが奄美大島に放されて間もない1980年、私は東京からふるさとの奄美大島に帰郷しました。東京で暮らした2年間の間に、私は奄美の自然がいかに特別なものであったかを思い知ったのです。帰ってきたふるさとの自然は、あふれるばかりの命をたたえていました。金作原ではたくさんのアマミノクロウサギ、アマミシカワガエル、アマミヤマシギなどが姿を見せ、飽きることはありませんでした。

マングースが放されたと聞いた時、島の多くの人にはハブが少なくなることを期待していましたが、私は即座に「大変なことが起きる」と直感しました。その予感当たり、金作原からは徐々に生きものたちの姿が消えていきました。私たちは、奄美の生態系を守りたい一心から、マングース対策の必要性を多くの人に訴え続けました。

証言 2



マングースの恐ろしさ 伝えたかった

半田 ゆかり(はんだ ゆかり) さん
(奄美哺乳類研究会・獣医師)

仲間たちと「奄美哺乳類研究会」を立ち上げ、マングースの調査を始めたのは1989年のことでした。その頃、奄美大島ではマングースによる農業被害が目立っていました。私たちは農業被害だけでなく、奄美の生態系に対してマングースがどれだけ悪い影響を及ぼしているのかを、島の人たちに理解してほしいと思い、マングースが何を食べているのかを調べたり、アンケート調査をしたりしました。貴重な動物たちがマングースの胃袋の中から見つかるたびに、その恐ろしさを実感しました。そして、次第に広がっていく被害を目の前に、島民による捕獲だけでは不十分で、専門的な捕獲集団が必要だと感じました。今、奄美マングースバスターズが、まさにその役目を担っており、マングースの数が目に見えて減っている状況は、素晴らしいと思います。これから完全排除までの道のりも大変だと思いますが、応援していきたいと思っています。



1979 昭和 54 年

沖縄島から持ち込まれたマングースが奄美大島に放される。

1989 平成元年

生態系への影響調査開始(奄美哺乳類研究会)

1993 平成 5 年

有害鳥獣捕獲開始(市町村)

1996 平成 8 年

生息調査・駆除モデル事業開始(環境庁・鹿児島県)

有害鳥獣捕獲補助開始(鹿児島県)

2000 平成 12 年

本格的な駆除事業開始(環境庁)

2003 平成 15 年

有害鳥獣捕獲事業終了(鹿児島県・市町村)

2005 平成 17 年

外来生物法施行

奄美大島マングース防除事業開始(環境省)

奄美マングースバスターズ結成

防除実施計画策定

2007 平成 19 年

探索犬導入

2013 平成 25 年

第2期防除実施計画策定

未来 2022 平成 34 年

奄美大島からマングースを完全排除

証言 3



マングースは 完全排除できます

福田 稔(ふくだ みのる) さん
(奄美マングースバスターズ)

私は2000年から、島の皆さんとともに一般従事者としてマングースの捕獲を始め、もう13年もマングースを追いかける日々を過ごしています。最初は自分でわなを作っていました。わずか30個程度のわなしかありませんでしたが、それでも月に120頭を捕ったこともありました。次第に、マングースがいそうな場所がわかるようになり、このこと思った場所では必ず捕れるようになりました。

しかし、ここ数年は目に見えてマングースの数が減り、腕に自信がある私でも多くは捕れなくなりました。それでも長年かけて養った目で、マングースが残っていそうな場所を探し、そこで捕獲を続けています。こうした地道な努力を続けていれば、マングースは必ず完全排除できます。13年かけて積み上げた成果は、決して無駄にはなりません。



証言 4



完全排除達成まで 応援します

高 美喜男(たかし みきお) さん
(NPO 法人奄美野鳥の会)

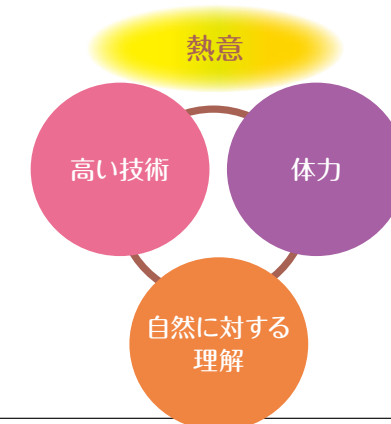
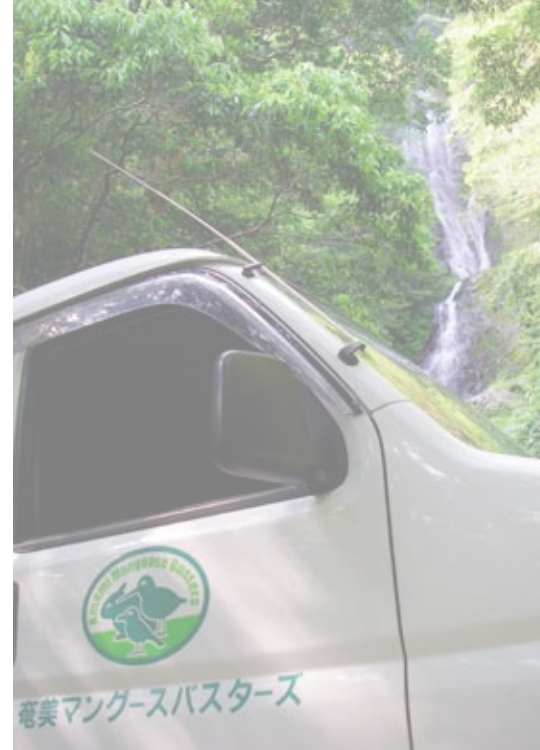
私たち「奄美野鳥の会」では1994年から毎年、オオトラツグミの調査をしています。始めた頃は50羽ぐらいしか確認できず、絶滅してしまうのでは心配したものです。しかし、2013年には500羽以上も確認することができました。同じように、アマミヤマシギも徐々に増えています。金作原では、少し前には見ることができなかったアマミシカワガエルやアマミハナサキガエルの鳴き声も聞かれる様になりました。こうした生きものたちの回復をもたらしたのは、マングースの減少が大きな要因だと思います。

奄美大島のマングース対策は、たくさんの島の人たちや奄美マングースバスターズの努力によって進められてきました。これからも、みんなで応援して、一日も早くすばらしい奄美の自然を取り戻したいですね。

奄美の自然を守るプロ集団

奄美マングースバスターズ！

奄美マングースバスターズは、奄美大島からマングースを完全排除し、奄美の生きものたちをよみがえらせることを目的として、2005年に結成されました。マングースを捕まえるための高い技術、山の中を歩き通す体力、奄美の自然に対する理解、そして奄美の自然をよみがえらせる熱意を持った男たちです。時に豪雨にうたれ、ハブと遭遇しつつも、日々奄美の森の中で作業するマングースバスターズは、奄美の自然を守るプロ集団です。



よみがえれ！ 奄美の生きものたち



在来動物のモニタリング調査

マングースを減らしていく中で、奄美の生きものたちがどのように回復してくるのかを確かめるため、モニタリング調査をしています。島全域に設置している自動撮影カメラでは、アマミノクロウサギやアマミトゲネズミ、アマミヤマシギなどが、徐々に増えて生息地を広げている様子がとらえられています。また、わなの点検作業をする時にも、周りの生きものたちの声や姿に注意を払い、確認した場所を記録しています。

日々の作業を進めていく中で、生きものたちのよみがえっていく姿が確かめられることは、バスターズにとって仕事の成果を知ることであり、また誇りでもあります。



自動撮影カメラによって撮影されたケナガネズミ(左)とマングース(右)

少しでも多く、早く、マングースを捕る

わなによる捕獲作業

マングースを減らすために、最も効果的な方法は、わなによってマングースを捕獲することです。2000年のマングース防除事業を始めた当初は、地域の皆さんの協力を得て、「カゴわな」による捕獲を進めました。その後、奄美マングースバスターズが本格的に活動を始めると、より広い範囲で捕獲できるようになり、更に新たなわなとして作業がしやすい「筒わな」を導入しました。現在ではマングースの生息するほぼ全ての場所にわなが設置されています。わなは約50m間隔でライン状に約3万個が設置され、奄美大島全域を覆うネットワークの様に配置されています。わなにはマングースを誘う餌として塩豚やスルメなどを付けています。



カゴわな

最近ではマングースがかなり少なくなり、滅多に捕獲されません。そこで、数が少なくなったマングースがどこにいるのかを知るために、「ヘアトラップ」(マングースの毛を採って居場所を突き止める道具)や、「自動撮影カメラ」(カメラの前を動物が横切ると自動的に写真が撮られる道具)を使っています。こうして、残されたマングースを探し出しながら、捕獲を続けています。



筒わな



ヘアトラップ

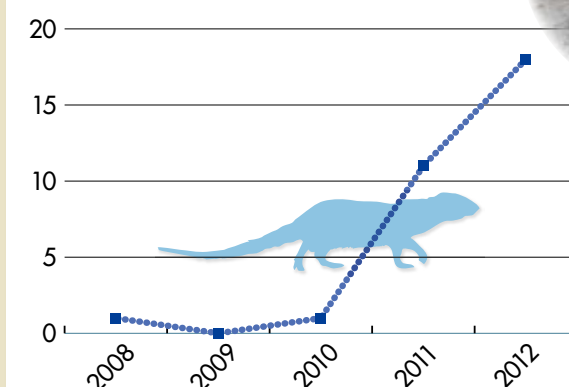
マングースを探し出す、高感度センサー

探索犬

マングースを効率的に捕獲するため、マングースを探し出す犬の導入・育成を進めています。こうした犬は探索犬と呼ばれ、すぐれた嗅覚と運動能力、そして人の指示を理解しそれに従う能力を持っています。探索犬はハンドラーと呼ばれる訓練士(奄美マングースバスターズメンバー)と一緒に森の中に入り、マングースの臭いや糞を探し、時にはマングースが潜んでいる穴を突き止めます。マングースの数が減ってきた中での探索犬の役割は重要で、マングースの完全排除に向けてその活躍が大いに期待されています。



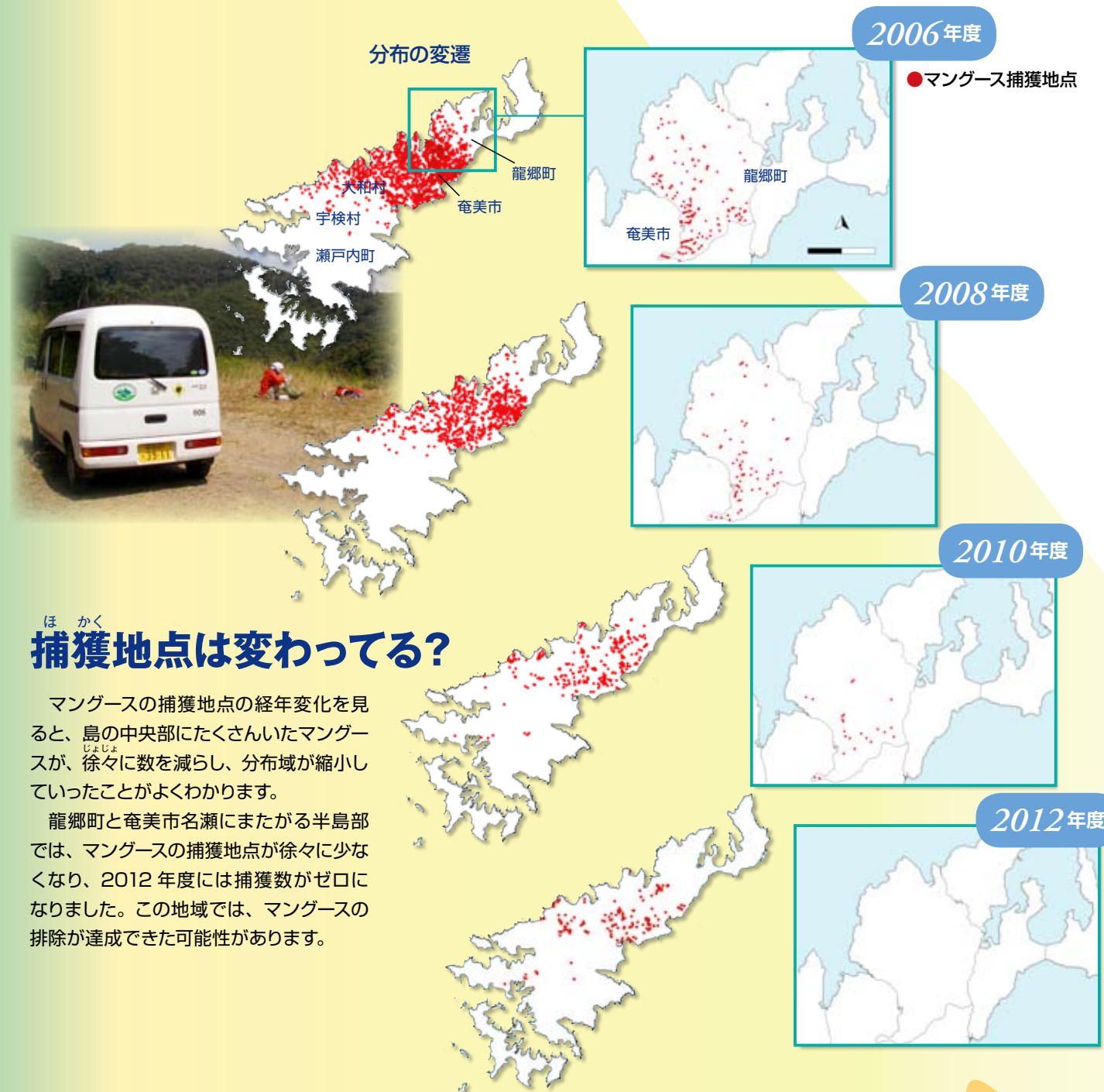
探索犬の発見によるマングース捕獲数



世界初！マングースの完全排除まであと一歩

奄美大島の面積は712km²、こんなに大きな島で外来哺乳類を完全に排除できた例は、世界でもほとんどありません。本来マングースは南アジアに生息する動物でしたが、現在ではカリブ海の島々やハワイなど、たくさんの島に外来種として定着しています。そうした島々でも、マングースがもともといた生きものを食べてしまったり、農業に被害を与えるなど問題になっています。

これまでに、マングースの完全排除に成功した例は、4km²以下の小さな島だけです。奄美大島のように大きな島で完全排除が達成されれば、世界初の快挙となり、マングースで困っている世界中の人たちにとっても大きな希望となるでしょう。この快挙を達成するためにはまだまだたくさんの課題がありますが、あと少しでその夢が叶いそうです。あと一歩。



マングースの分布は狭くなっている！

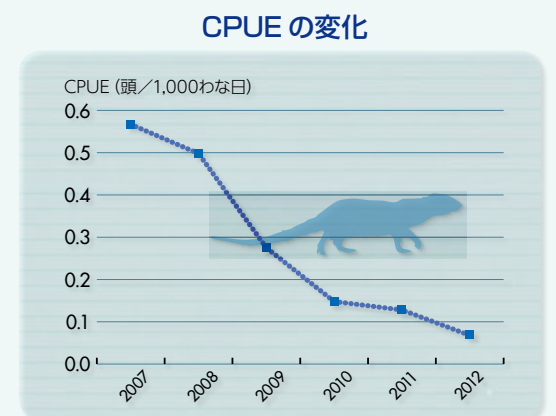
マングースは減っている？

奄美大島ではこれまでに32,000頭以上のマングースが捕獲されてきました。奄美マングースバスターズが活動を開始した2005年から、わなの数は大幅に増えているに関わらず、マングースの捕獲数は減り続けています。

マングースの生息密度（面積当たり何頭いるか）の変化を知るためには、CPUE という数値を使います。CPUEは「のべ1,000個のわなで何頭のマングースを捕ったか」という指標です。野球に例えれば、マングースの捕獲数は「ヒットの数」、のべわな数は「打席数」、CPUEは「打率」にあたります。このCPUEを年度毎に比較すると、ここ数年でマングースの生息密度が明らかに減少していることがわかります。



のべわな数（折れ線グラフ）とは、わなを設置したのべ日数で、例えば100個のわなを10日間設置すると1,000わな日になります。奄美マングースバスターズの活動開始以来、のべわな数は急増し、ここ数年はほぼ200万わな日を維持しています。捕獲数（棒グラフ）は捕獲開始以降減少傾向にあり、特にここ数年は著しく減っています。

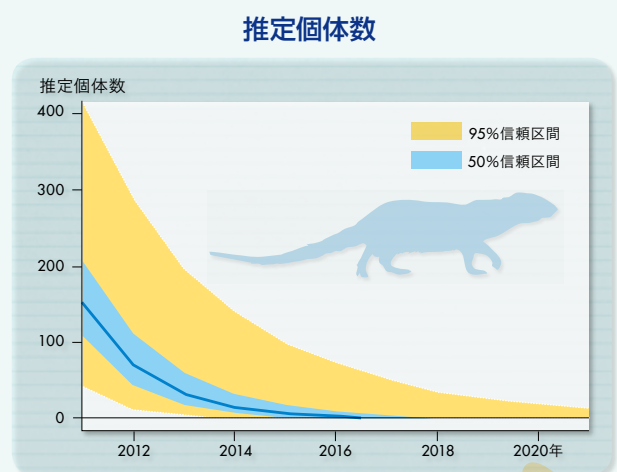


CPUEは、1,000わなあたりのマングース捕獲数であり、マングースの生息密度を反映する指標です。CPUEは急激に低下しており、マングースが少なくなっていることがわかります。

確実に減らしている！

マングースは完全排除できる？

継続的に捕獲作業を進めてきたことで、2000年頃には約10,000頭が生息していた奄美大島のマングースは、2012年には上限値でも300頭以下にまで減少したと推定されています。しかし、残りわずかになったマングースを捕りつくすことが、本当にできるのでしょうか？その疑問にこたえるため、将来を予測してみました。その結果、このままのペースで捕獲が続いた場合、マングースは今後も減少を続け、2020年頃にはほぼゼロになると予測されました。実際には、数が少なくなればなるほどマングースを捕獲することは難しくなるので、予測どおりにはいかないかもしれませんが、完全排除はもう遠くない未来に見えています。



困難を乗り越えて完全排除できる！

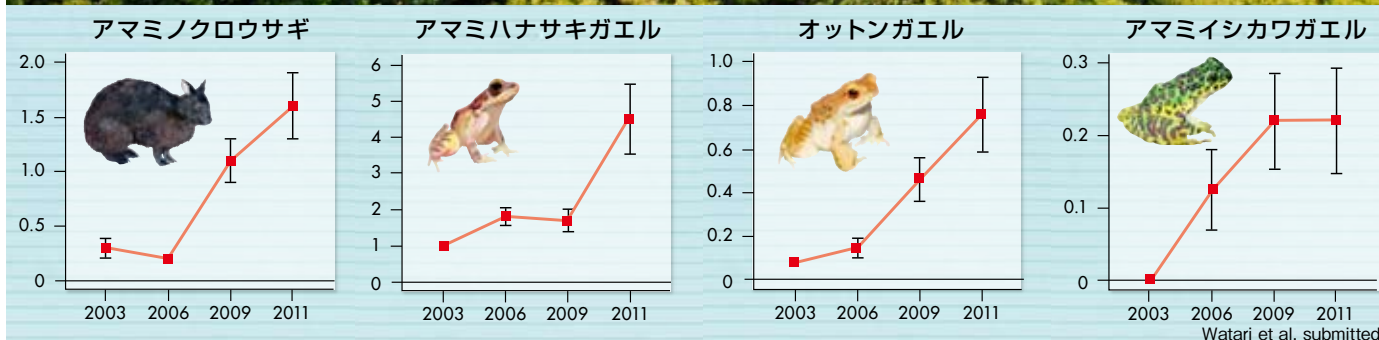
マングースがいない森へ

マングースが減って、 奄美の生きものたちが戻ってきた！

マングースが減り始めたことによって、奄美の森に多くの生きものたちが戻ってきています。奄美マングースバスターズによるモニタリング調査の結果では、アマミトゲネズミやケナガネズミ、アマミノクロウサギなどの生息する範囲が広がっていることがわかってきました。

下グラフは亘悠哉さん（日本森林技術協会）らが2003～2011年にかけて、奄美大島の真ん中を南北に走る奄美中央林道で奄美の生きものたちの数を調べた結果です。どれも急激に数を増やしています。

奄美大島でマングース防除事業が始まったのが2005年。マングースが減ってくるにつれて、奄美の生きものたちはどんどん増え始めました。マングースが完全排除されれば、どれだけたくさんの生きものに会えるようになるのか、楽しみですね。



このグラフは、全長41.1kmの奄美中央林道を夜間に車でゆっくり走り、見つかった動物を数えるという、根気強い調査の結果です。調査は各年に4回実施されていますが、縦軸には調査1回あたりの発見数、横軸には調査をした年が示されています。

奄美の森は変化しています

奄美の森は、数年前から変化しています。島の南西部にしかけていたカゴワナには、「また君か!」と嬉しい悲鳴をあげるほどアマミトゲネズミが多く捕れるようになりました。かつてマングースの恰好の餌場だった場所は、今やアマミノクロウサギの公衆トイレにとって代わっています。私がマングースの捕獲にかかわりはじめてから10年が経過し、今やこれらの光景は日常化しつつあります。ただし、まだ楽観視できる状況ではありません。マングースが着実に減少している一方、林内に設置された自動撮影カメラには、人に捨てられた、もしくは野放しにされたネコやヤギなどが目につくようになりました。これらが野生化し、奄美の生態系へ及ぼす影響も無視することはできません。外来種問題の元凶が私たち人間にあるのですから、それを解決するのも私たち個々人の意思にかかっていると考えています。

山下 亮（奄美マングースバスターズ）



がんばるワン

第2期 マングース防除実施計画

奄美大島のマングース防除事業では、2005年に防除実施計画を策定し、10年間の作業計画に沿って防除を進めてきました。この事業によって、マングースの低密度化を達成するとともに、マングース防除のための各種データが蓄積され、完全排除への道筋がより明確に示されてきたことが

ら、2013年に「第2期奄美大島におけるマングース防除実施計画」を策定しました。2022年度までに奄美大島からマングースを完全排除することを目指して、奄美マングースバスターズを中心に計画的な防除を進めていきます。

計画の概要

目標

奄美大島に生息するアマミノクロウサギやアマミヤマシギなどの在来種の生息状況の回復を図るためにマングースの防除を行い、マングースの一層の低密度化及び局所的な排除を進め、最終的に奄美大島からマングースを完全に排除することを目標とする。

防除の体制

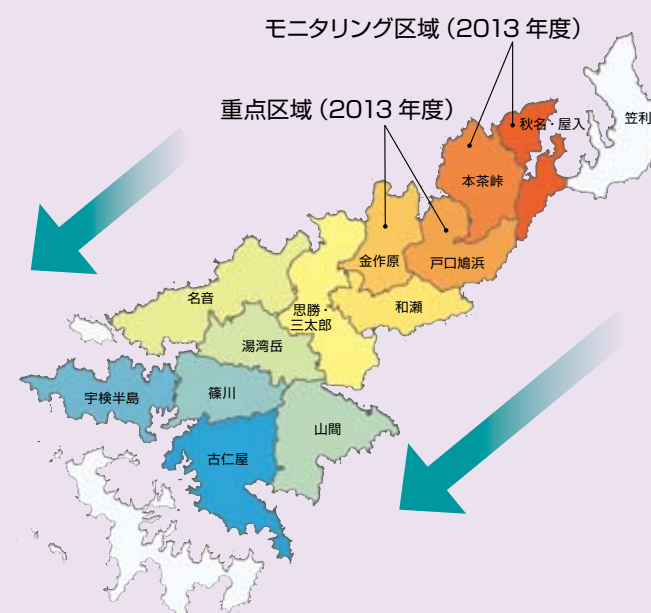
わなによる捕獲や生息確認調査などの作業は、奄美マングースバスターズを中心とした組織的な体制を確保した上で、計画的に行う。また探索犬の育成を図りつつ、マングースの探索作業を行う。

具体的な目標

- 目標① マングースの分布域全域において一層の低密度化を進めるとともに、分布域の北端から作業区域毎に順次局所的な排除を達成し、2022年度（平成34年度）までに奄美大島からのマングースの完全排除を目指す。
- 目標② 技術開発を推進し、捕獲技術などの向上を図る。
- 目標③ 在来種の回復状況を評価し、必要な措置の検討などを行う。
- 目標④ 普及啓発を推進し、広く一般の理解・協力を得る。
- 目標⑤ 防除の実施状況などについて定期的に評価し、必要な改善を図る。

完全排除に向けた防除の方針

- ①地形状況などを踏まえ、奄美大島を60km程度の面積で区分する。
- ②マングースの分布域北端に「重点区域」を設定し、当該区域内のマングースの排除に向け、集中的な捕獲作業などを行う。
- ③②の作業によってマングースが残存する可能性が低くなった区域は「モニタリング区域」に移行し、マングースの残存個体の有無を確認するための作業を行う。
- ④「重点区域」が「モニタリング区域」に移行した段階で、南側に新たな「重点区域」を設定する。
- ⑤「重点区域」設定前の区域は「低密度化区域」として、マングースの一層の低密度化を進めるための捕獲作業などを行う。
- ⑥以上の作業を進めることにより、分布域北端から順次マングースを排除した区域を拡大させ、最終的には分布域南端において奄美大島からの完全排除を達成する。



第2期マングース防除実施計画の本文は→ <http://kyushu.env.go.jp/naha/wildlife/data/gairai/boujyo/130425b.html>